

姻戚関係と農業協働の再編

—中国湖南省の農村部におけるハス栽培を事例に—

劉 丹

総合研究大学院大学 文化科学研究科 地域文化学専攻

要 旨

本稿は、中国湖南省の農村部におけるハスの大規模栽培を事例として、姻戚関係に基づく経済的相互扶助の実態を明らかにする。

中国の漢族社会においては、血縁関係が姻戚関係より重視されてきたため、姻戚関係は長らく軽視されてきた。しかし、姻戚関係を扱った研究がまったく存在しなかったわけではない。従来の研究では、姻戚関係は結婚や葬式など特定の儀礼的場面で取り上げられ、贈与を通じて強化および再生産されるものの、永続的な関係としては想定されにくいと理解されてきた。また、母方オジのような特定の人物の役割が強調される一方で、それ以外の姻戚関係は一括して扱われる傾向がある。

さらに、姻戚関係は血縁に比べて脆弱で境界が曖昧であるとされる一方、経済的相互扶助の局面では血縁より優先される場合もある。このように、姻戚関係は比較的安定した社会関係資本として理解されてきたと言える。しかし、これまでの姻戚関係の研究は主に儀礼やそれに伴う贈与といった非日常的な側面に焦点が当てられてきた。姻戚間に相互扶助が頻繁に見られるという一般的な指摘はあるものの、姻戚間の経済的相互扶助という日常実践に着目した研究は限られている。このような背景を踏まえると、経済的相互扶助という日常実践への着目が欠けている現状において、姻戚関係を安定した社会関係資本としてとらえ続けてよいのかという問題が生じる。

本稿は、こうした課題に応えるべく、儀礼や贈与といった非日常的側面ではなく、姻戚による経済的相互扶助という日常的側面に焦点を当てる。調査対象は、湖南省農村部においてハスの実の収穫を目的として活動する経営グループである。ハス栽培は大量の労働力と資金を必要とし、当該グループは共同居住および共同労働を基盤とした経営形態をとっていた。この経営形態は、中国における農業の集団化期を想起させるものである。集団化に関わる労働や平等をめぐる議論は、本稿の分析においても重要な示唆を与えた。

本稿は、詳細な民族誌的データに基づき、ハス栽培に関わる農業経営主体の形成過程と運営方法を明らかにするとともに、労働分配や給与配分における姻戚関係の葛藤、さらにグループ内における平等意識のあり方を検討した。その分析から、姻戚関係には柔軟で拡張可能な性質が備わっており、多様なコンフリクトや、一時的に利用される「使い捨て」な関係も内包していることが明らかとなった。したがって、農業経営において姻戚関係は協働を促進する一方で、実際の労働分担や平等意識と交錯しながら、柔軟でありながらも不安定な「資源」として機能しているといえる。

キーワード：姻戚関係、農業経営、中国湖南省、農村部、ハス栽培、日常、労働、平等

Affinal Relations and the Reconfiguration of Agricultural Cooperation:

A Case Study of Lotus Farming in Rural Hunan, China

LIU Dan

Department of Regional Studies,
School of Cultural and Social Studies,
The Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI

Summary

This paper examines economic practices grounded in affinal relations through a case study of large-scale lotus cultivation in rural Hunan Province, China.

In Han Chinese society, consanguineal ties have historically been valued more highly than affinal ones. Consequently, affinal relationships have long been overlooked in scholarly research. This neglect, however, does not mean that studies on affinal ties are entirely absent. Previous research has primarily examined these relations within specific ritual contexts—such as weddings and funerals—where they are strengthened and reproduced through gift exchange. Yet, while certain affinal roles, notably the maternal uncle, have received attention, other types of affinal relationships have often been treated collectively and without differentiation.

Moreover, although affinal ties are frequently described as more fragile and ambiguously bounded than consanguineal relations, they can sometimes take precedence over blood ties in contexts of economic mutual assistance. In this sense, affinal relationships have been conceptualized as a relatively stable form of social capital. Nevertheless, existing studies have predominantly focused on non-everyday aspects, such as rituals and the accompanying gift exchanges. Although mutual aid among affines is commonly acknowledged, research that specifically investigates the everyday practices of economic mutual assistance within affinal networks remains limited. This gap in the literature raises the question of whether affinal ties can indeed be regarded as stable social capital.

To address this question, this paper shifts the focus from the extraordinary domains of ritual and gift exchange to the everyday dimension of economic mutual assistance among affinal kin. The study investigates a management group engaged in lotus seed production in rural Hunan. Lotus cultivation requires substantial labor and financial investment, and the group operated through a management structure based on co-residence and collective labor. This organizational form evokes the collectivization period of Chinese agriculture, and debates surrounding labor and equality from that era provide important insights for the present analysis.

Drawing on detailed ethnographic data, this paper elucidates both the formation and the operational methods of an agricultural management entity engaged in lotus cultivation. It also examines the tensions rooted in affinal relations that emerged in the distribution of labor and wages, as well as the ways in which notions of equality were articulated within the group. The analysis reveals that affinal relations possess a flexible and expandable character, encompassing a spectrum of conflicts and even “disposable” ties that are mobilized only temporarily. Thus, while affinal relationships facilitate cooperation in agricultural management, they also function as a flexible yet unstable “resource,” intersecting with practical labor arrangements and local conceptions of equality.

Key words: affinal relations, agricultural management, Hunan Province, China, rural areas, lotus cultivation, daily life, labor, equality

- | | |
|-------------|---------------------|
| 1 はじめに | 3 姻戚関係を基盤とする農業経営の実践 |
| 1.1 研究の背景 | 3.1 経営グループの結成 |
| 1.2 研究の目的 | 3.2 資金の調達と役割分担 |
| 2 調査地とハス栽培 | 3.3 解消されない不平等 |
| 2.1 調査地の概要 | 3.4 日々の衝突 |
| 2.2 ハス栽培の導入 | 4 考察と結び |

1 はじめに

1.1 研究の背景

中国では近年、姻戚関係の重要性が増しており、農業経営においても姻戚関係にある人を経営メンバーに加える事例が多く見られる（郭 1994; 張 2003; 刁 2009）。これは、集約型農業を目指す土地制度の改革にともない、農業経営における労働力・資金の確保やリスク分散の必要性が高まっていることと密接に関係している。本稿は、中国湖南省の農村部におけるハスの大規模栽培を事例として、姻戚関係に基づく経済的な連携の実態を明らかにする。

漢族社会では、血縁関係と姻戚関係が厳格に区別される傾向があり、特に父子関係を基盤とする血縁関係が姻戚関係よりも重視されてきた（秦 2005: 9; 費 2019: 161）。たとえば、父系出自集団である宗族は、中国の伝統社会を構成する基本的単位とされてきた（賈 2017: 15）。社会主義的改造が進められた集団化期においても、「男が外、女が内」という家父長制的な分業意識は制度的に温存されていた（宋 2012）。その後、改革開放以降の急速な市場経済化の進展に伴い、女性の稼得労働への参加や行為主体性が議論されるようになったものの（堀江 2024: 81-82）、多くの農村では依然として、女性が家庭内労働を担うことが「当然」とみなされ続けている。

しかし、国家による宗族や祖先崇拜などの慣習への規制、家族改革や自由結婚の推進といった政策の影響により、家父長制の権威は次第に弱まり、婚姻を媒介とした関係が血縁中心の関

係に取って代わるようになってきている（閻 2012: 90-117）。さらに、計画出産政策の実施によって一人っ子家庭が増加し、宗族の母体組織の縮小も生じている（施 2019: 25-27）。こうした社会変化は、姻戚関係の重要性が相対的に高まる背景として理解することができる。

1.2 研究の目的

姻戚関係は、個人にとって重要な社会経済的資源であり、安全装置としても機能することが指摘されてきた。しかし、従来の研究は主に儀礼や贈与の分析に焦点を当ててきた。地域差はあるものの、姻戚関係において婿は岳父（yuefu、妻の父）および岳母（yuemu、妻の母）を定期的に訪問し、旧正月などの節目には贈答品や金銭を渡すことが多い。子どもの生後1か月の祝いにおいては、特にヨメの母親や兄弟の役割が強調される。たとえば安徽省の農村では、ヨメの母親が子どもの衣服や布、産婦の回復のための栄養食を用意することが期待される（Han 2001: 189）。

また、姻戚関係においては、母方オジ（舅舅、jiujiu）の役割が特に重要視される傾向が広く見られる。安徽省、山東省、江蘇省などの農村地域では、子どもの命名の際に母方オジの意見が重視されるという報告もある（Han 2001: 151; 中生 2023: 86; 費 2007: 73）。また旧暦8月15日の中秋節には、母方オジを訪問する際に他の親戚よりも多くの贈り物をするのが慣例である。安徽省の農村では、月餅に加えて白酒4本と鶏2羽を

持参するのが礼儀とされ、他の親戚には月餅のみを贈る (Han 2001: 191)。また、嫁入りした女性が死亡した場合には、葬送儀礼において母方オジとその息子が主賓を務める。さらに、死者の息子が生前に親不孝であったとみなされる場合、母方オジやその従兄弟が葬儀の場で公然と非難することもあるという (Han 2001: 190; 李 2010: 209-214)。

さらに、一部の農村地域では、農業労働、融資、住宅の新築、農具の購入といった場面において、姻戚関係が労働力および資金の重要な供給源となっている。宗族内部の男性メンバーのあいだでは「平等」の意識が強く、1人に金銭を貸すと他の宗族メンバーからの依頼を断りにくくなる。そのため、借金の申し出を拒むことが関係の亀裂を生む要因となることも少なくない。このような状況が、姻戚関係を通じた経済的協力をより柔軟なものとして位置づける要因になっている (Han 2001: 159-169)。

また、姻戚関係は血縁関係とは異なり、婚入女性の死亡や世代交代などを契機として徐々に希薄になる傾向があることも指摘されている (植野 2001: 338; 刁 2016)。さらに、姻戚関係は断ち切ることが許される関係とみなされる場合もある。たとえば1950年代の中国では、「地主dizhu」「富農funong」「中農zhongnong」「貧農pinrong」といった階級区分が導入されたが、湖北省の農村では妻の父親が「地主」とされたため、婿がその関係を避けるようになり、その息子は共産党員を志望するにあたり、母方オジとの関係を自ら断ち切ったという (秦 2005: 166-167)。

このように、漢族社会における姻戚関係は、儀礼と贈与を通じて強化・再生産される一方で、永続的な関係として想定されるものではない。母方オジやヨメの両親のような特定の人物とは儀礼的義務を伴う関係が維持されるが、その他の姻戚とのつながりは比較的緩やかである。父系の系譜と比べると、姻戚関係は脆弱で明確な境界を持たない。この特性ゆえに、経済的な相

互扶助の場面においては、父系の親族関係よりも姻戚関係の柔軟性が効果的に機能するといえよう。

しかし、これまでの姻戚関係の研究は、儀礼や贈与といった非日常的な側面に焦点が当てられることが多く、姻戚間の経済的な視点での分析は限られてきた。そこで本稿では、儀礼的なやり取りではなく、姻戚間の経済的な相互扶助という日常的な実践に注目する。

本稿で扱う経営グループは、姻戚関係を基盤とし、共同労働および共同居住の形でハス栽培を行っていた。農業労働は作物の成長段階に応じて作業内容や労働強度が変わり、作業ごとに担当や労力の配分も異なる。特にハス栽培は、多くの労働力・資金・時間を要する作物であり、天候不順や水管理の失敗などによるリスクも大きい。そのため、経営グループに多くのメンバーを取り入れることは、労働力の確保のみならず経営上のリスク分散にもつながっている。

この経営形態は、中国における農業の集団化の時代を想起させる。集団化期には、男女を問わず多くの労働力が動員され、田畑の耕作から家事労働、収穫まで、役割が分担されていた。また、労働生産の効率化のため、公共食堂や託児所などによる家事労働の社会化も試みられた (大橋 2024: 23-24)。女性は公的な生産活動に従事する一方で、子育てなどの家事労働も担っていた (郭 2003)。このように、賃金に結びつかない労働も社会的に可視化され、女性も社会主義建設を支える重要な労働主体として位置づけられていた。

さらに、集団化において問題視された平均主義の影響も見逃せない。盧暉臨は、安徽省の農村部における家屋建設ブームを手がかりに、農民の社会的行動を規定する心性の歴史的形成を分析した。彼は、改革開放期以降に見られる「攀比panbi」(見栄の競争) 的行動を単なる市場化の結果ではなく、集団化時代に形成された平均主義的心性の持続として捉える。盧によれば、

集団化期の政治的平等化は「他人より出過ぎてはならない」「皆と同じであるべきだ」という価値観を内面化させ、それが後に「遅れてはならない」という競争心理へと転化したという（盧2006）。この心性の持続は、制度的転換後の社会関係や協働のあり方を理解するうえで重要な視座を提供する。

こうしてみると、姻戚関係を基盤とする経営グループの分析においては、「労働」と「平等」は重要なキーワードといえよう。こうした観点を踏まえ、本稿は、姻戚関係に基づく経済的相互扶助の実態と、グループ内部における労働負担および平等意識を明らかにする。

2 調査地とハス栽培

2.1 調査地の概要

X鎮は湖南省（図1）東部に位置し、江西省と隣接する農村地域である。中国の行政単位は、省、市、県、鎮・郷で構成され、鎮は日本の町村レベルの行政区に相当する。X鎮の直轄下にある中心街には鎮の人民政府や交番、学校が集中している。中心街以外には、19の行政村が存在する。総人口は約4.5万人であり、総面積は227.8km²で、その約75%を山地が占める。耕地面積は約4.3万ムー（約2566.7ha）、林地は約24.8万ムー（約16533.3ha）の面積を有している¹⁾。

鎮内には、複数の大型企業が存在し、また、X鎮は「国家農業産業強鎮」のリストに追加さ

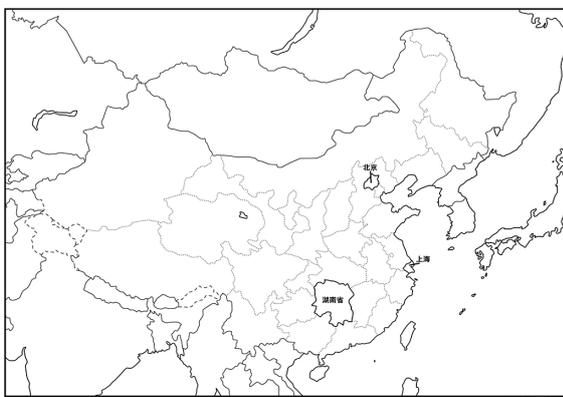


図1 中国における湖南省の位置

れた。このリストは、中国政府の農業農村部と財政部が、農業の産業化が進んでいる郷鎮を全国的な模範として位置づけるために作成したものである。このようにX鎮は全国の郷鎮の中でも、農業の集約化が進んでいる地域として中国政府によって認められている。

本稿は、湖南省望郷県（仮名²⁾）X鎮を主な調査地とし、2023年5月から2024年2月、並びに同年4月から10月までの約17か月間にわたって実施した現地調査に基づいている。調査対象は、X鎮においてハスの実の栽培事業に従事する労働者、経営者、ハスの実の加工者、およびその他の関係者である。

2.2 ハス栽培の導入

中国では、1980年代に導入された農家請負制度により、農民は家族単位で請け負った土地で自主的に農業を営むことが可能になった。一方で、この制度は農業の零細経営という問題もはらんでいた。また、出稼ぎへの参入が進んだことで、農村部では耕作放棄が見られるようになった。

農業の近代化、農民の収入増加、穀物の安定生産、さらには都市化と工業化の促進を実現するために、土地制度の改革が打ち出された。この政策により、農家は農地の交換、賃貸、現物出資などで、農地を流動化させ、それによって経済的な利益を得ることが可能になる。また、栽培者は零細農家から土地を集約し、集約的な農業生産を行うことが制度上可能となった（中華人民共和国農業農村部: 2021年）。

この改革により、農業生産の現場では、これまで農業の主たる担い手であった零細農家に代わって、大規模専業農家や企業の存在感が増している。また、中国各地では農産物の大規模栽培が進み、タバコ、野菜、果樹といった換金作物の作付面積が拡大している（山田2017）。

このように農作物の集約的な生産が進むなか、望郷県ではハスの実の収穫を目的とするハスの

大規模栽培が導入された。このハス栽培は土地制度の改革に加えて、重金属（カドミウム）による土壤汚染とも関係している。この地域では、1970年代から2000年代にかけて、鉄鉱の採掘が進められ、それに伴い、一部の土地がカドミウムに汚染された。このような汚染された耕作地では、コメの代わりとして、カドミウムの吸収率が少ないトウモロコシ、サツマイモ、ハスの実などの農作物の栽培が推奨されている（望郷県人民政府弁公室 2017年7月27日、2023年3月21日）。

ハスの実は中国社会において重要な嗜好品の1つである。ハスの実は漢方薬として広く使用されるほか、高級食材として贈答品にも使われることがある。たとえば中秋節には月餅の餡として用いられるほか、清朝期や中華民国時代にはハスの実の海外への輸出の記録が残されており、現在でもベトナム、タイ、マレーシアなど多くの国々に輸出されている（湘潭県地方志編纂委員会編 2015: 369; 広昌県志編纂委員会編 2010: 166-167）。

現地の情報によれば、2017年頃、湖南省湘潭と江西省出身のハス生産者と加工者は山地に沿ってハス栽培に適した水田を探し、望郷県に集まってきたという。湘潭におけるハス栽培の歴史は2000年前まで遡ることができ、湘潭を中心とした地域で生産されたハスの実は「湘蓮 xianglian」と呼ばれており、広く世間に認知されている（湘潭県地方志編纂委員会編 1995: 341）。一方、江西省には中国最大のハスの実の取引市場が設けられており、ハスの育種も盛んに行われている地域である（江西省広昌県県志編纂委員会編 1994: 401-403）。

両地域のハス生産者および加工者の影響を受け、望郷県出身者もハスの大規模栽培に参画するようになった。筆者が調査したX鎮では、水資源の確保が難しい村を除いて、2017年以降のわずか5～6年の間に行政管理下にある19の行政村のうち9つの村でハスの実の大規模栽培が開始

された。これらの村における2024年時点でのハスの実の栽培の規模で最小は60ムー（約4ha）、最大は500ムー（約33.3ha）に達している。なお、2024年時点でX鎮のハスの実の栽培面積は1万ムー（約666.7ha）を超えたと、現地のハス生産者は推定している。

ハス栽培は集約型の労働であり、植付けから除草、施肥、収穫に至るまでの作業の多くは手作業で行われている。特に収穫期には、1日に数十人から100人を超える労働者が集まることもある。こうした大量の労働力の確保や資金調達を可能にするため、栽培者たちは血縁、姻戚、地縁といった関係を基盤とした経営グループを組織しており、そのなかでも姻戚関係はとりわけ重要な役割を担ってきた。

本稿で取り上げる経営グループの中心人物であったLは、県内出身者のなかで最も早く大規模なハス栽培に着手した人物の1人である。つづく第3章では、Lを中心とした経営グループを概観する。

3 姻戚関係を基盤とする農業経営の実践

3.1 経営グループの結成

まず、Lを中心に姻戚関係を基盤とした経営グループの結成の経緯について説明する。L（30代後半、男性）は望郷県公安局の非常勤警察官であり、妻のJ2（30代後半）は湖南省邵陽市出身で、現在は望郷県水利局に勤めている。2人は専門学校で知り合い、結婚に至った。

2018年頃、Lは親友のZ（30代後半、男性）の紹介で江西省出身の加工者と知り合い、ハスの実の栽培に参画するようになった。2018年から2021年にかけて、LとZは共同出資でハス栽培を行い、その栽培面積は50ムー（約3.3ha）から、100ムー（約6.6ha）へと拡大していった。収穫されたハスの実は、江西省出身の者が運営する加工所へ販売された。Zは出身村で人脈と名声を持つ人物であり、2023年秋には村の書記に就任したという。彼はハスの実の加工技術やハスの

実の加工品の販売ネットワークを自らのものとする野望を持つ。2022年には、Zの妹の夫であるS（妹婿meixu、30代）とともにハス栽培事業の拡大に着手し、X鎮で1000ムー（約66.6ha）の水田を借りた。さらに2023年には、Sに加え、江西省出身の加工業者2人と協力し、ハスの実の加工所を運営するようになった。

ZとLによる共同栽培は2021年に終了した。その後、Lは個人で約50ムー（約3.3ha）の水田を請け負い、単独で栽培を行うようになった。2022年には、Lがこの50ムー（約3.3ha）のハスの実の栽培によって約10万元（約214.5万円、2025年のレートで換算）の利益を上げたと、親戚の間で噂された。

翌2023年、Lは妻の姉夫妻（J1・K）、妻の弟夫妻（J3・P）、さらに自身の姑姑（gugu、父の姉妹）と姑父（gufu、父の姉妹の夫）、すなわちL2とTの4家族とともに、新たなハスの実の栽培事業を開始した。彼らはX鎮において、合計約500ムー（約33.3ha）の水田の使用権を取得し、大規模な栽培に乗り出したのである。

図2を基に、Lらの関係を整理しておきたい。まず、J1とJ2は姉妹であり、L（30代後半）とK（40代前半）はそれぞれと結婚している。この場合、妻同士が姉妹である男性同士は、中国語で連襟（lianjin）または連橋（lianqiao³）と呼ばれる。

連襟は同じ家の娘婿として一定の義務を共有

しており、妻の両親（岳父母yuefumu）を日常的に訪ねたり、正月などの特別な日に贈り物や「紅包hongbao⁴」を贈ったりすることが期待される。連襟同士の関係は協調を基本とし、互いに競争する行為はほとんど見られないと指摘されている（植野 2001: 341-342）。しかし、刁は、岳父の前で競い合うこともあると述べている。また、連襟同士の関係は、自家の婚礼や葬儀といった儀礼の場では比較的緩やかなものにとどまるが、日常的な交際の頻度や親密さによって、その関係の濃淡が左右される（刁 2016: 261）。他方で、連襟同士の間で経済的な連携が多く見られることも指摘されている（閻 2012: 137-138, 2017: 126-127）。調査地における姻戚関係も上述の特徴を共有している。

J3（30代前半）はLとKにとって「内弟neidi」（妻の弟）にあたる。LとKは妻の兄弟に対して特に定型化された義務を負わないものの、社会的活動を援助する存在として期待される。連襟・内弟・姉夫はいずれも、最も多額の金銭的援助を提供する姻戚関係とされている（閻 2017: 121）。

なお、Lの姑姑であるL2（60代前半）と姑父であるTもハス栽培に加わった。L夫妻は、姑姑夫妻に対して儀礼的な贈答や日常的な訪問などを行うことが期待される。しかし、LとJ2の結婚を通じて、J3とKはLの姑姑夫妻とつながりを持つようになったものの、彼らの間では特に定型

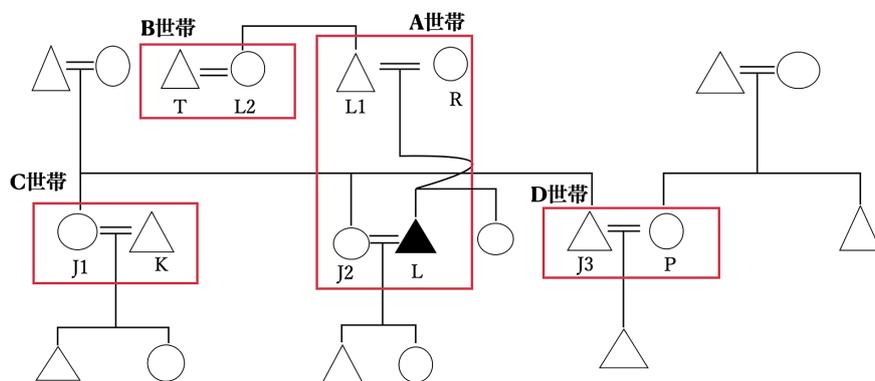


図2 家系図（フィールドノートに基づき筆者作成）

注：枠線内は、ハス栽培に参加した人物を示す。A世帯（L1・R・L・J2）、B世帯（T・L2）、C世帯（J1・K）、D世帯（J3・P）。

化された義務は存在せず、日常生活においても顕在化していない。

さらに、Pにとって、J1（40代前半）とJ2は「大姑姉dagujie」（夫の姉）にあたる。この関係はヨメと姑の関係に共通する部分があり、両者の間にはしばしば緊張関係が見られる。一方で、ヨメと姑、ヨメと大姑姉、兄弟の妻同士より遠い関係者は日常生活や権利・義務関係においてもほとんど意味を持つ存在ではないとされた（植野 2001: 346-347）。

Pにとって夫の姉の夫であるKやLは、礼を尽くすべき存在である。L2とT（60代前半）はLの姑姑と姑夫にあたり、とりわけJ3のヨメとしてのPにとっては、強いて言えば遠い親戚のさらに遠い親戚にあたる。基本的には赤の他人に近い存在であり、P自身も「彼女たちは私と関係がない」（她们和我又没啥关系）と述べている。

このように、Lは事業のさらなる拡大を目指し、友人関係を基盤とした経営形態から、家族・親族を中心とした経営形態へと移行した。構成メンバーをみると、この経営グループは連襟や内弟といった姻戚関係を基盤としつつ、栽培事業を通して、これまで比較的交流の薄かった姻戚関係者にも、新たな接触と協働の機会を提供していた。

3.2 資金の調達と役割分担

この経営グループの関係を確認したうえで、出資状況と役割分担を整理しておきたい。4家族は同額の資金を出し合い、共同で事業を行うことを「合伙hehuo」と呼んでいる。こうした点から、実際の出資者であり、各家の代表者であるL、T、K、J3の4人が「老板laoban」（ボス）に当たる。彼らの妻たちも作業に参加するが、発言力は夫ほど強くない。

ただし、この4家族の経済的状況にはばらつきがある。L夫妻、K夫妻、T夫妻はいずれも乗用車を所有している。L夫妻はメンバーの中で唯一、政府機関に勤務しており、最も経済的に余

裕がある。Lは非常勤ながら警察組織に所属しており、現地では社会的評価の高い職と見做されている。T夫妻は望郷県の建築現場で働いており、自らの貯金を出資に充てたという。

J3夫妻とK夫妻は、これまで広東省や浙江省など各地で出稼ぎをしてきた。J3は父から12万元（約247.2万円）、妻のPから3万元（約61.8万円）を借り入れた。Pの3万元は、結婚時に受け取った結納金（彩礼caili）の一部である。また、Kは定期貯金を有していたが、ハス栽培のために同郷の友人から2万元（約41.2万円）を借りていた。このように、出資には貯金だけでなく借金も含まれており、集められた資金は水田の賃借料や整備費、農業資材、食費などに充てられた。

資金のほかに、ハスという作物を栽培するためには一定の知識も必要である。ハスは多年生植物であり、4月頃に「藕種ouzhong」（苗用の地下茎）を植え付けると、その年の7月頃から収穫が始まる。収穫後には新たに伸長した地下茎が土中に残され、翌年には自然に萌芽して再び生育が進む（広昌県農業局科技組編 1975: 6）。このため、2024年には植え付け作業を除き、同じ作業内容が繰り返されていた。

具体的な作業スケジュールは以下の通りである。4月には苗用地下茎の植え付けに加え、用水路や畦畔の整備を行う。5月下旬までに耕耘機を用いた除草を行い、同時期に畦畔や農道に除草剤を散布する。湛水が維持できなくなる場合は、雑草が繁茂するため、除草は手作業で行われる。7月中旬から10月上旬は収穫期にあたり、年間で最も作業量が多い。

植え付け、除草、収穫などの作業は主にアルバイト労働者が担当し、Lら経営者は労働者の募集、出欠管理、作業指示、進捗確認、収穫物の選別・搬出などを統括する。これらの作業は一見単純に見えるが、栽培経験がなければ効率的に進めることは難しい。

しかし、メンバーのなかでハス栽培の経験を有するのはLのみであり、彼には5年間の栽培歴

がある。K夫妻とJ3夫妻は長年出稼ぎをしていたため、農作業に関しては経験に乏しい。T夫妻は多少農作業の経験を持つものの、ハスについての知識は持っていない。そのため、水田の下請けをはじめ、作業スケジュールや農機具・資材の購入といった主要な決定は、すべてLによって行われていた。

このようなLは、水田の請負に関して村との交渉も行った。水田の使用権は1ムーあたり年間450元（約9700円）で取得され、そのうち50元（約1078円）がサービス料として村に支払われた。使用期間は2023年から2025年までの3年間であり、賃借料とサービス料は毎年支払われた。なお、望郷県内の水田賃借料の相場は1ムーあたり年間約300元（約6467円）であり、Lらが借りた水田の賃借料は相対的に高額であった。それでも、Lらはハス栽培事業の拡大を目指した。収穫されたハスの実は、Lの親友であるZが経営する加工所に販売される予定であった。

ただし、Lが借りた水田は一箇所に集中しておらず、X鎮の2つの村にまたがっている（図3）。肥料や労働力を運ぶために新たに三輪トラックを1台購入し、Lが所有する古い三輪トラックや

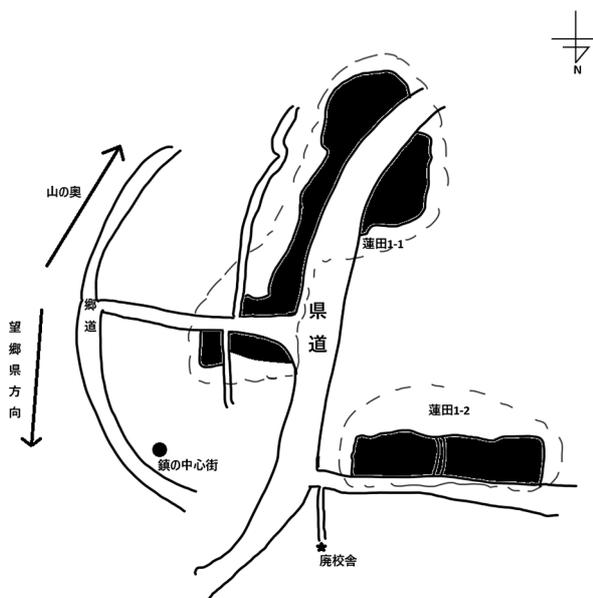


図3 蓮田と廃校舎の位置（フィールドノートに基づき筆者作成）

バイクもハス栽培の作業に利用されている。これらの水田はX鎮の主要道路に隣接しており、交通のアクセスは比較的良好である。Lは廃校舎を借り、経営グループの住居兼作業場として利用することとした。廃校舎から蓮田1-1までは約4km、蓮田1-2および中心街まではいずれも約3kmの距離にある。

作業期間中、Lらは廃校舎に住み込みで作業を行う予定であった。この廃校舎は旧小学校であり、年間の賃借料は2500元（約53600円）であった。食事費としては、各家族が年間2000元（約42800円）を現金で拠出し、その管理をJ1が担っていた。

用水路や畦畔の整備といった力仕事は、男性メンバーのL、K、J3、Tが担当し、なかでもJ3が多く作業を担っていた。2023年7月21日から10月中旬までの収穫期には、Lの蓮田に1日あたり約40人のアルバイト労働者が集まり、4人は交代でハスの実の運搬や加工所への搬送、労働者の監督を行う予定であった。

一方、食事や洗濯などの家事労働は女性が担っていた。洗濯は各家の妻が行い、食事は主に図4の⑩のキッチンで共同調理され、調理はJ1とPの2人が担当することが多かった。また、キッチンやトイレなどの共有部分の清掃はPが行っていた。

家事労働に加えて、女性たちは栽培作業の一部も担っていた。J1は労働者の出勤管理と校舎でのハスの実の選別を行った。Pは廃校舎内で調理をし、ハスの実の選別と天日干し作業を手伝っていた。L2は毎日ハスの実の加工所に通っていた。収穫後のハスの実は加工所で脱蓬⁵⁾機にかけられ、花托と実に分離される。その際、花托からうまく分離できなかったものについては、補助的に手作業で分離された。分離作業が終わった後、ハスの実の計量は加工所の管理者とL2によって行われた。

2023年7月にはL2が加工所での作業を担当していたが、1か月後に夫のTとともに自宅へ戻り、

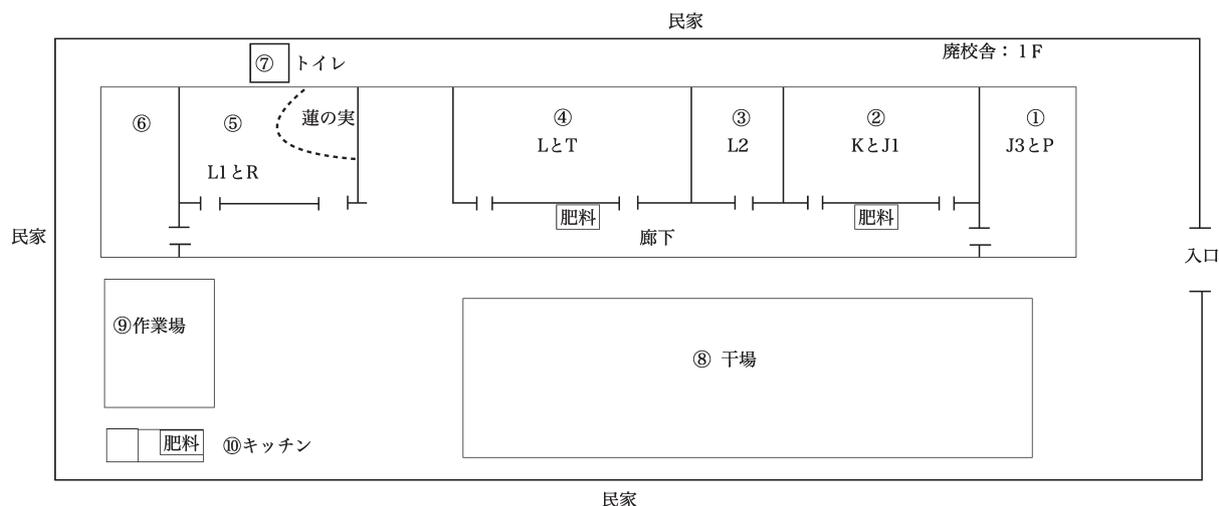


図4 廃校舎の配置図（フィールドノートに基づき筆者作成）

その後はPがその作業を引き継いだ。Pはしばしば、夫であるJ3が運転する三輪車に乗って加工所へ向かった。L2とTが蓮田を離れた理由は、後述する赤字経営によるもので、損失を避けて別の仕事で収入を得ようとしたためである。その後、Kも2人の離脱を受けて浙江省へ出稼ぎに向かった。

三人が離脱をした後、J1は蓮田から校舎へのハスの実の運搬や食事の準備を担当し、J3は蓮田・校舎・加工所の間を行き来しながら作業に追われていた。ときおりLも休みや夜勤の合間に蓮田へ手伝いに来ることがあったが、全体として労働の分配は必ずしも平等ではなかった。

各家族から少なくとも1人は栽培現場で働き、借用した校舎に住み込むことが求められていた。しかし実際に校舎に住み続けたのはJ1、J3、Pの3人であった。図4に示した①と②の部屋は、それぞれJ3夫妻およびK夫妻の住居として使用されていた。一方、LとTは校舎に宿泊することは少なく、④の部屋は昼休憩用に使われていた。

こうした状況から、2023年においてはJ3夫妻のみが他の収入源を持たず、ハス栽培が唯一の生計手段となっていた。作業分担の不均衡や、ハス栽培への拘束によって他の収入機会を失う状況は、J3夫妻にとって極めて不平等なもので

あった。上述した共同作業および共同生活に関する主要な作業は表1にまとめた。表1に記載したA1～A12およびB1～B7は、それぞれの作業項目を示している。また、このグループにおける仕事の分担は表2のとおりである。

本来、出資者全員が「老板」となるはずであったが、この経営グループではLの経験とリーダーシップを軸に共同経営が進められた。すなわち、この経営グループは、形式上の平等（同額出資、共同作業）と実質的な格差（経済力、栽培経験、労働負担）の共存によって特徴づけられる。意思決定は経験と社会的地位を有するLに集中しており、特定の家族（J3夫妻）に経済的・労働的負担が偏る構造となっている。性別による作業分担も併せ、資源、知識、労働の分配に不均衡が存在することが明らかとなっている。

3.3 解消されない不平等

経営グループのメンバーには労働に対する給料は支払われず、収穫後のハスの実の売上が2023年の労働報酬であり、生活を支える基盤になるはずであった。しかし同年、Lらは赤字経営に陥った。K夫妻とJ3夫妻によれば、その要因は施肥の時期が遅れたことにあり、Lの指示が遅れた結果、成長期のハスは十分に栄養を吸収でき

表1 主要作業

			作業内容	作業場所
1	蓮田に関わる作業	A1	栽培スケジュールの決定	
2		A2	労働者の募集	
3		A3	蒔種・肥料・農薬の調達	
4		A4	用水路の整備	蓮田
5		A5	肥料の運搬	廃校舎→蓮田
6		A6	労働者の出勤確認	蓮田
7		A7	収穫したハスの実の運搬	蓮田→廃校舎
8		A8	完熟前と完熟のハスの実の仕分け	廃校舎
9		A9	完熟したハスの実の天日干し	廃校舎
10		A10	完熟前のハスの実の運搬	廃校舎→加工所
11		A11	花托から分離した完熟前のハスの実の重量確認	加工所
12		A12	労働者への賃金支払い	廃校舎
13	家事労働	B1	食事の準備	廃校舎
14		B2	食器洗い	
15		B3	食材の購入と食費の管理	
16		B4	お湯を沸かす（烧开水）	
17		B5	犬の世話（えさやり）	
18		B6	キッチンやトイレなど共同空間の掃除	
19		B7	洗濯	

ず、収穫量も減少したという。こうした状況をめぐり、J3夫妻、K夫妻、T夫妻の間ではLに対する不満が高まったが、T夫妻以外はLに不満を直接ぶつけることはほとんどなかった。むしろ、J3夫妻とK夫妻のあいだでLに関する陰口がささやかれるようになった。

加工所での作業中、Pは加工所の管理者や他のハス栽培経営者と雑談することが多かった。Pは校舎の雰囲気について、「すべては2番目の姉夫のせいだ。みんなこっそり彼を責めている。50ムーの栽培の方法をそのまま500ムーに使うなんて、ばかばかしい」（全都是因为他二姐夫，现在大家都在说他。居然用种50亩＜約3.3ha＞的方法去种500亩＜約33.3ha＞，真的太蠢了）と語り、Lを強く批判している。

X鎮に移住して以降、Pは現金収入を得ること

ができず、わずかな貯金を切り崩して生活していた。食事は共同で賄われていたものの、生活消耗品やお菓子などの出費は各自の負担であった。この状況のなかで、2023年8月末頃、Pは自身の労働に対して賃金を支払うべきだと主張し、J3やJ1に対して「給料をくれないと邵陽＜Pの実家＞に戻る」（要是不给我工资，我就回邵阳）と告げた。

Pによると、「みんなで共同ビジネスをするなら、みんながボスだね。本来は各家庭から少なくとも1人はここにいる必要がある。彼＜L＞の姑姑＜L2＞と姑父＜T＞は出て行ってしまった。彼＜J3＞の姐夫＜K＞も外に働きに行った。うちの家庭は、私と夫の2人もここで働いているよ。少しも平等ではない」（大家一起合伙大家都是老板，本来每一户人家都要至少有一个人在这里的。

表2 作業分担

A世帯				B世帯		C世帯		D世帯	
L1	R	J2	L	T	L2	J1	K	J3	P
A4	A9	B7(自宅)	A1	A4 *	A9	A6	A4 *	A4	A8
A5	A11		A2	A5 *	A11	A7	A5 *	A5	A9
A7	A12		A3	A7 *	B7	A8	A7 *	A7	A11
A10	B7		A4	A10 *		A9	A8 *	A9	B1
			A5	A11 *		A12	A10 *	A10	B2
						B1 *		A11	B4
						B3			B5
						B5 *			B6
						B7			B7

太字は出資者を示し、*は短期間のみ作業に従事したことを表す。塗りつぶしは、2024年から作業に加わったことを示す。

他姑姑父跑了。他大姐夫也出去赚钱了。我和我老公两个人都在这里工作。一点都不公平)と主張する。

J3とJ1はLとも相談したが、当初、賃金の支払いはされないことになっていた。その後、Pは長沙行き⁶⁾の列車のチケットを購入し、望郷県内の駅まで赴いたが、夫のJ3に「長沙に行くなら離婚する」(你要是去长沙就离婚)と言われ、彼女の行動は阻止された。最終的に、収穫終了後に共通経費から月額1000元(約21400円)がPへの給料として支払われることが決定した。

繰り返しになるが、2023年、Lらは赤字経営に陥った。一方、Lが個人で経営していた50ムー(約3.3ha)の蓮田は赤字にならなかった。このことは、J3夫妻やK夫妻にとって、いっそう大きな不満を抱える要因となった。2023年の収穫後、J1とJ3夫妻は蓮田を離れ、それぞれ実家の近くの長沙でアルバイトを始めた。旧正月に実家へ戻った後も、再び長沙でアルバイトを続け、2024年4月にハス栽培のため廃校舎に戻った。

彼らが望む平等を実現するため、2024年にはLの両親がLに代わって蓮田で働き、廃校舎に住むようになった。同時期、2023年に途中で

離脱していたL2も家の代表として図4の③の部屋に居住し、蓮田での作業に加わるようになった。

しかし、各家のメンバーは形式上ハス栽培の作業に関わっているものの、作業への関与の濃淡は依然として解消されることはなかった。たとえば、Lの母であるRと姑姑のL2は調理や皿洗いをほとんど行わず、家事は基本的にPが担当していた。

L1は主に用水路や畦畔の整備を担当し、収穫期にはJ3と交代でハスの実の運搬も行った。RとL2は一時期、校舎でハスの実の選別や天日干し作業を担っていた。ただし、加工所での作業は比較的軽労働と見なされていたため、R、L2、Pの間で、誰が加工所に行くかをめぐって静かな駆け引きが行われていた。

こうした日々が続く中、2024年8月以降、女性には1日あたり80元(約1715円)、男性には1日あたり100元(約2144円)の賃金が支給されることになった。その中で、J1は特例として1日あたり100元(約2144円)を受け取ることとなった。J1は、蓮田からハスの実を運搬するなど、通常は男性メンバーが担当する作業を行っていたためであ

る。

賃金は共通経費から支払われる予定であったが、ハスの実の販売による収益が共通経費に反映されるのは収穫期終了後であり、その精算もたびたび遅れた。そのため、食費を除く共通経費は実質的にほぼゼロとなり、L夫妻が自らの貯金を用いて立て替える状況が続くこととなった。

2024年9月10日、全員が8月分の賃金を受け取った。L2は、Lの父であるL1に対し、労働日数に応じた賃金の精算に加えて排水溝整備の作業代を支給することを提案した。この提案について、Lの母であるRは賛成したものの、J3らは強く反対した。とりわけ、J3は「去年、僕も同じく排水溝の整備をしていたが、何ももらっていない。なぜ今回は特別に彼にお金を支払うのか」（去年我也修了，什么都没有。为什么现在要给他钱呢）と怒っていた。

すると、L2とRはPの寝坊や怠け癖を批判し、Pは自分たちと同じ時間に起きるべきだと主張した。また、Rは「彼女<P>が蓮田に行っていないので、給料をもらう資格がない。80元<約1600円>って、そんなに楽にもらえるの?」（她又没有去田里面，没有资格拿工资。80块钱那么好拿吗）と声をあげた。この発言には、Pが比較的楽な作業ばかりしており、自分たちと同じように汗を流すべきだという含意が込められている。

結局、Lの両親やL2とJ3との間で口論となり、全員分の給料は回収された。翌日にLが来るまで、校舎内の雰囲気は張り詰めていた。J3はPに食事の準備や仕事をせず、部屋にいるように指示を出した。Lが到着したのは翌日の9月11日午前10時頃であった。その間、Pは朝から部屋で寝たふりをしていた。同時に、LとJ3、J1らは、給料について相談したが、Pはその具体的な内容を知らなかった。ただ、Lらが給料分配について合意した午後2時頃には、一度回収された賃金が再び全員に配分された。

しかし、9月12日になると、PはLおよびその

両親から加工所に行くことを禁じられた。これまでの駆け引きは暗黙のものにとどまっていたが、加工所への出入りを禁止する旨が口頭で言及されたのは、この時が初めてであった。

2023年には、赤字経営や作業負担の偏りによりLへの不満が内部で高まったものの、多くは陰口として共有されるにとどまった。2024年、不平等を解消するためLの両親とL2が作業に加わったが、給料の支払いをめぐる対立など、さらなる混乱が続いた。日給制度の導入により一定の賃金は支払われたものの、作業負担の偏りや不平等感は依然として残り、日常的な口論や摩擦も目立つようになっていたのであった。

3.4 日々の衝突

2023年において、校舎に住み続けたJ1とPのあいだで、日常的に衝突が多発していた。だが2024年からはRとL2も校舎に住むようになり、Pとの摩擦が恒常化するようになっていた。一方で、J1とR・L2のあいだの衝突はそれほど顕著ではなかった。

①義理の姉妹関係にあるPとJ1の不和

Pは20代で、夫のJ3より6歳年下である。日々の立ち居振る舞いは子どものように見えることもあった。一方、義理の姉にあたるJ1は30代後半で、勤勉で真面目な性格の持ち主として、周囲のハス栽培関係者から高く評価されている。とりわけ、三輪トラックを運転して蓮田から校舎へハスの実を運ぶ姿は、その勤勉さを象徴するものとされ、もともとは男性が担うことの多い作業を引き受けている点でも注目される。これに対し、Pはヘビヤカなどを恐れて蓮田に入ることが少なく、作業への参加は限定的であった。こうした両者の違いは、食事の準備や食器洗いの分担、さらには食費の精算といった日常的な場面で摩擦として表れていた。

2023年の収穫期、Pは加工所に行かない日は校舎で全員分の調理と食器洗いをしてきた。ただし「全員分」といっても、料理皿や鍋に加え、P

自身と夫のJ3、J1の分に限られていた。時折、筆者や、仕事の合間に立ち寄るLの分が増える程度である。食事が終わった後、J1はいつも自分の皿だけを洗った。これに対し、Pは「なぜ食事を作ったのに、全員分の食器まで自分が洗わなければならないのか」(为什么我明明做了饭还要洗所有人的碗)と不満を抱き、J1が食器洗いをするべきだと考えていた。また、J1はPに使用後の厨房や鍋の汚れを「トイレのように汚い」(像厕所一样脏)と指摘した。さらに、Pは朝が苦手で、食事中にもしばしばスマートフォンを使用しており、この点についてもJ1は厳しい言葉をかけることがあった。

J1は全員分の食費を管理していた。これに対し、Pは(食用の)ザリガニやドリアンといった好物を購入するために県を中心街まで出かけ、校舎に持ち帰って他の成員と共に食することが多かった。しかし、その費用をJ1に請求しようとしても、「それはあなた<P>の好物である」(那是你爱吃的东西)「他姑父<T>が食べていない」(他姑父又没吃)といった理由によって、しばしば拒否された。これは、僅かな現金しか持たないPにとって負担となった。さらに、J1が「ザリガニを買っていいよ」(可以买小龙虾)と口頭で許可したにもかかわらず、実際に送金されたのはわずか2元(約40円)にとどまり、このことも両者の口論を誘発する要因となった。

こうした状況の中で、PはJ1に見下され(被看不起)、あくまで「外人wairen」(よそ者)として扱われていると感じていた。Pの語りによれば、J1は自分が絶対に正しいと信じ、中卒である自分よりも、高卒であるPのほうが劣っていると主張していた。また、J1はJ3のことを「弟弟didi」と呼ぶ一方で、Pには「小○」と名前と呼んでいた。J3の2番目の姉であるJ2はPのことを「弟妹dimei」と呼んでいた。PはJ1のこうした呼び方に敏感で、これを「外人」として扱われる符号だと受け取っていた。その一方で、PはJ1のことを「他姉tatie」(直訳すると<彼の姉>、す

なわちJ3の姉)と呼んでいた。

加えて、J1は経営グループのメンバー以外の前でも、Pに対して容赦なく指摘を行っていた。廃校舎では、加工所のオーナーを招いた食事が開かれることもあり、Lも必ず出席していた。ビールが酌み交わされ、会話も盛り上がる中、オーナーが実家の別荘建設の話をした際、Pが費用について尋ねると、J1は「そんなことを聞くな。この場ではあなたに発言の権利はない」(你问这个干嘛，有你说话的地方吗)と叱責した。夫のJ3は、Pのことを積極的にかばうことはなかった。Pはその場では沈黙したものの、WeChat(微信)⁷⁾では筆者に「<加工所の>オーナーに聞いているのに話を遮ってくるのは教養がない」(我明明在问那个老板又没问她<J1のこと>，她直接打断我的话没有教养)、「賤人jianren」(卑しい人物の意、ここではJ1を指す)、「棺桶に入るべき」(他大姉那个该死到棺材里面)といったメッセージを送信していた。

2023年10月頃、ハスの実の収穫が終わり、J3夫妻とJ1はそれぞれ出稼ぎに出た。2024年2月、旧正月のため彼らは邵陽の実家に戻った(J3とPは同じ村の出身である)。その際に、J3とPの間で喧嘩が発生した。Pは、これまでJ1から受けてきた扱いへの不満を訴え、J3の前でJ1を「賤人」と呼び、「死んだほうがましだ」(死了最好)と罵った。それを聞いたJ3は思わず手を上げ、Pをビンタした。

この喧嘩により、2人は離婚寸前の状況となった。J3の両親とJ1は離婚に賛成しており、J3の母親とJ1は「もし離婚したら、すぐにいい女を見つけてやる」(你们要是离了，我马上给他<J3>找个更好的)とPおよびPの母親に言い放った。彼らは、Pの存在が家族関係を悪化させたと認識していた。

J3はPに対し、「私と一緒に暮らすためには、まず姉と両親と仲良くすること」(不离也可以，不能把和我姐爸妈的关系弄的那么僵)が条件であると伝えた。また、Pは「二度と校舎に住まず、

X鎮に行く際も自分の部屋を借りる」(之后不要再住在那个学校里面了,我们去镇上自己租一个房子)という口約束をJ3と交わしていた。自分の部屋を借りることは、PがJ1との摩擦を回避するために考えた策であった。

しかし、2024年にはX鎮でも校舎に住み込むこととなり、Pは再びJ1と直接関わらざるを得なくなった。上述のように、J1からPへ、厨房がトイレのように汚いという指摘が続いた。とりわけ、J3とPが夫婦喧嘩になった場合は、J1はJ3を味方につけていた。

2024年9月12日、Pは自費で手羽先を5本購入し、夕食のおかずとして食卓に出した。PがJ3に食べさせようとする、J3は拒否した。これに対し、Pは「物事のよしあしや人の好意がわからない」(不识好歹bushihaodai)と怒りを示した。J1は弟の味方として「夫にそんなことを言い続けるなら、手羽先を全部犬にやるぞ」(你还对你老公说这样的话,这些鸡翅全部丢给狗吃)と発言した。Pが「やってみな」(有本事你试试)と応じると、J1はPを「心が黒い、腹が黒い」(黑心黑肚子。陰險の意)と罵った。

翌日、Pは筆者に「あの時はビール瓶で彼女<J1>の頭を殴りたかった」(我那个时候真想把啤酒瓶砸她头上)と述懐した。J2はPとJ1の衝突を聞き、自身の姉であるJ1に対して「彼ら<弟の夫妻>のことには関わらないほうがよい」(他们夫妻的事情还是不要管了)と助言した。しかし、Pが廃校舎を離れるまで、J1との摩擦は頻繁に続いた。

②PとL2・Rとの摩擦

2023年には、赤字経営や労働分担の不均衡が目立つ中、廃校舎に住んでいたJ1とPの衝突が顕著であった。2024年からは、Pと新たに加わったR・L2との衝突も繰り返されるようになった。Pはハス栽培を契機にX鎮へ移住し、端午の節句などにはJ3らに同行してL宅で食事をすることもあった。こうした集まりや作業を通じて、PはR・L2との接触を始めた。

2024年6月10日の端午節、J3夫妻とJ1は車に乗ってLの家に向かった。PはLの姑姑に息子が出稼ぎに行ったかどうか尋ねたが、無視されたという。筆者が理由を尋ねると、Pは「わからない。おしゃべりをしてしたが、彼女<J1>が聞くときは、彼<L>の姑姑は全部話す」(我怎么知道,就在那里聊天嘛,她姐问她姑姑又都说了)と述べた。

同年、RおよびL2が校舎に住み込みで作業に参加するようになり、PにとってはJ1に加えて、自らを指摘する人物が増えることとなった。特に、Pの起床時間はしばしば問題視され、LからはRらと同時刻に起床すべきだと求められていた。Rらは朝6時前に起きることが多かったのに対し、Pは9時前に起きることが多かった。LもPの起床時間の遅さに腹を立て、Pを叱った。これに対し、Pは「あなたは何者だ」(你他妈算老几)と言い返し、Lは「私はあなたの姉夫だ」(我是你姐夫)と応じた。すると、Pはさらに「姉の夫だからといって、こんなことをしていいのか」(姐夫就可以这样吗)と返した。

こうした緊張関係のなかで、PはLに強い態度を見せつつも、内心ではLを恐れていた。2024年9月13日朝、Pは午前6時50分に起床し、全員分の朝食を準備した。その後、ショートビデオを視聴しながらゆで卵を食べたところ、Rが「あなたと同じ賃金を受け取るはずがない。何もしていないのに」(你不该和我们拿同样的工资,什么也没做)と声をあげた。これを受けて、Pは夫のJ3に事情を伝えた。J3は、PがRから直接指摘を受けないよう配慮し、彼女を蓮田周辺に連れ出してハスの実の選別作業を行わせた。しかし、Rはこれを遊びに出かけたと誤解し、不快そうな表情を見せていた。

Rは蓮田から戻ってきたPに対し、飼い犬の餌代の精算を求めた。この要求はJ1にも及んだ。というのも、PとJ1は邵陽から移住する際、それぞれ飼い犬を1匹連れてきていたからである。なお、飼い犬の餌は、しばしば食事の残飯があて

られていた。これに対して、両者は「去年は無償で労働を提供してきた。飼い犬の餌代を請求される筋合いはない」(去年我们免费给你们干活,居然要我们出狗的伙食费)と反論した。

しかし、このやり取りにLの両親は激しく反発し、「あなた<P>とは共に作業をしたくない」(不想和你一起做事)と言い放ち、校舎を離れる構えを見せた。これに対して、Pは「校舎を出ない人は犬だ」(谁不走谁就是狗)と発言した。Lの両親は自身が「犬」と呼ばれたと受け取り、Pに「あなたの母こそ犬だ、あなたの家族全員は犬だ」(你妈才是狗,你全家都是狗)と怒鳴った。Lの父であるL1はPに手を上げようとしたが、J3がその場にいたため、暴力に及ぶことはなかった。さらに、L2も口論に加わり、Pを罵った。

ここでの「犬」(狗gou)は、中国、特に漢族社会の日常生活において侮蔑や軽蔑を示す語用として広く理解されており、単なる比喩的言辞を超えて、相手の人間性や社会的立場を否定する意味を帯びる。L1は、Pが自分を「犬」と罵ったと息子のLに訴えた。これに対し、Pは「あなた<L1>を指して言ったのではない。校舎を出ない人を犬と言っただけ」(我又没说你是狗,我只是说谁不走谁是狗)と説明した。その後も口論は続き、最終的にPは「もういい、自分のことを言っているのだな。私が犬でいいか」(随便,我说我自己。我是狗行了吧)とお手上げの様子であった。

口喧嘩に巻き込まれた妻Pに対して、夫であるJ3は彼女を庇うことがなく、「姉<J2>のために、彼ら<Lの両親>にいくら怒られても反論しない」(为了我姐,不管他爸妈怎么说我都随他们)と決めていた。というのも、J3らとLの両親で起る揉め事は、しばしばLとJ2夫婦喧嘩の原因になり、結果としてJ2の立場を弱めてしまうからである。その後、LとJ3の合意により、PとRの2人が校舎を離れることになった。Rはその日に校舎を離れたが、途中で忘れ物に気づき取りに戻って来たものの、車から降りることはなかつ

た。Pは2日後に邵陽へ戻ることにした。

女性同士の対立は一時的に沈静化したものの、Lらの内部に生じた亀裂は容易には解消されなかった。とりわけ、2024年のハス経営は再び赤字を計上し、経済的な困難な状態が顕在化した。2025年には、Lのみがハスの実の栽培を継続し、T夫妻、K夫妻、J3夫妻は栽培事業から脱退した。その後、J3夫妻、K夫妻は邵陽に戻り、再び出稼ぎに出た。離脱したメンバーが使用していた蓮田は、別のハス経営者に譲渡された。

この脱退によってLとK夫妻、J3夫妻との関係は完全に断絶したわけではない。しかし、互いに恨みを抱くような緊張をはらむ状態となった。K夫妻とJ3夫妻は、Lに関する陰口を言い合い、J3は当初、Lと姉のJ2の結婚を支持したことをさえ後悔するようになった。その後、J3の両親は、ハス栽培事業が失敗した原因として、ヨメであるPの無駄遣いを挙げ、彼らの間では衝突が繰り返された結果、J3とPは離婚に至った。ただ、こうした出来事はLが個人で進めるハス栽培事業の継続に支障をもたらすことはなかった。加えて、LとK夫妻、J3とのつながりは、もともと父系の親族関係ほど定型化された義務関係ではなく比較的緩やかなものであったため、この関係が緊張に転じたとしても、血縁関係の破綻ほど周囲からの強い批判を招くことはなかった。

4 考察と結び

参与観察で得られた経営グループの結成経緯(第3章1節)および関係者間の労働分担(第3章2節と3節)、日常的なやりとり(第3章4節)を手がかりに、姻戚関係に基づく農業経営の実態と、そのなかで見られる労働分担に対する考えや平等意識を明らかにした。

従来の研究では、姻戚関係者の経済的な相互扶助といった日常的な関わりに焦点を当てた分析は限られ、姻戚関係は主として社会的・経済的資源として論じられてきた。確かに姻戚関係は社会関係資本(Social capital)としての側面を

有するが、それは固定化した資源として理解されるべきではなく、状況に応じて柔軟に変容する動的な関係として、父系関係に比べて可変的な「資源」として捉える必要がある。

農業生産は常に不確実性をはらみ、事業の拡大には高いリスクを伴う。ハスの栽培事業の初期段階において、ZとLは主に友人関係に基づく社会的連携を通じて事業を展開していた。しかし、2022年以降、事業規模の拡大を志向する過程で、両者は親族、特に姻戚関係者との協力を積極的に導入するようになった。このように、経営の拡大過程において姻戚関係を経営資源として動員する点は、農業経営において姻戚を経営組織のメンバーに加える傾向を指摘した先行研究（郭 1994; 張 2003; 刁 2009）の知見と整合するものである。

実際、Lを中心とした経営グループのメンバーには、連襟・内弟・姉夫などの近い姻戚が組み込まれており、これらの関係は従来より議論されていた姻戚関係に該当する。さらにLにとって姑姑夫妻も経営グループに加わり、両親も自身の栽培事業を支えていた。J3の場合も、自身の姉とともに栽培事業に関わっていたと読み取れる。このことから、ハス栽培事業においては姻戚関係のはたらきが目立つ一方で、父系の親族関係も一定の役割を果たしていることがわかる。

この経営グループを詳しく確認すると、J3やK、さらにPにとって、Lの姑姑夫妻のように以前は姻戚関係として扱わなかった関係も資源として動員されていた。つまり、形式上はほとんど赤の他人に近い関係であっても、婚姻を媒介として栽培事業における資源として活用されていたのである。このことは、姻戚関係が固定的な枠組みに還元されるものではなく、多様な関係の構築・再編を可能にする実践が存在することを示している。

また、本事例は、経済的連携において姻戚関係が資源として前景化しやすい一方で、常にコ

ンフリクトを内包していることを示唆している。衝突の背後には平等意識や個々の性格、過去の関係性など、複数の原理が複雑に絡み合っていた。女性同士の対立では、たとえば、J1とPは大姉とヨメの関係にあたり、もともと緊張が生じやすい関係であった。両者の間では、J3をめぐる衝突に加え、調理や食器洗いの分担など些細な出来事や個人のパーソナリティに起因する摩擦も生じていた。この緊張した関係の中で、Pは回避策として夫と別の部屋を借りることを画策したが、夫の同意は得られず、2024年も同様の状態が続いていた。

さらに2024年には、Lの母であるRやLの姑姑であるL2など、従来は赤の他人に近い存在も両者の対立に巻き込まれた。特に彼女らとPの間で衝突が目立つようになったが、その多くは個人のパーソナリティや労働参加のあり方に関するものであった。女性同士の対立は最終的に、LとPが校舎を出ることで沈静化したものの、経営グループ内に生まれた亀裂は容易に埋められるものではなかった。

この経営グループの連携は、「合伙」と呼ばれる仕組みに基づいていた。4家族が同額の資金を拠出し、全員が「老板」として平等に事業を担うことが前提とされていたが、実際には唯一の栽培経験者であり、地位のある職業を持つLが作業スケジュールの管理や物資の購入を主導していた。このように、形式上の平等の背後には、知識、経験、経済力などの差が見られる。

もっとも、経営メンバーが重視したのは発言力や役割の差よりも、労働提供と負担分担の「平等」であった。2023年に赤字経営となり、TとKが途中で事業から離脱して自らの仕事に専念するようになって以降、この意識はいっそう強まった。しかし、彼らの考える「平等」とは、単に同等の労働量を提供することを意味するのではなく、自らが損失を被る場合には、他のメンバーも同様にその損失を分かち合うべきだという感覚に基づいていた。実際、2023年の赤字経営では、

本来であれば4組の夫妻が同額の損失を負うはずであったが、他の家族は別の収入源を確保していたため、ハス栽培による損失を部分的に補えた。この結果、J3夫妻だけが蓮田の作業に拘束され、出稼ぎの機会を失ったため、相対的に大きな損失を被ることとなった。

この「平等」は協働を促進する原理であると同時に、互いに牽制しあう契機ともなった。事例の中では、むしろ後者が顕著に現れており、特に女性同士の関わりでその傾向が目立っていた。たとえば、PとR・L2の間では軽作業をめぐる駆け引きが繰り返され、さらにPの起床時間など生活リズムに関する細部まで「平等」が論じられる場面が見られた。このような現象は、集団化期に形成された平均主義的心性（盧 2006）が、制度転換後の協働関係にも影を落としていくことを示唆する。

本事例において、姻戚関係は経済的資源として動員される一方で、ハスの栽培事業の失敗や日常的な摩擦によって緊張をはらみ、持続的な連携としては機能しなくなった。しかし、父系の系譜ほど強い拘束力を持たず、境界も曖昧で拡張可能であるため、容易に断絶・再編が可能である。たとえばハスの栽培事業が成功していれば、関係のあり方は異なる局面を迎えた可能性もある。したがって、姻戚関係は安定した資源ではなく、葛藤や交渉を含みつつ展開する動的なプロセスとして理解されるべきである。

以上のように本稿では、湖南省農村部のハス栽培を事例に、農業経営における姻戚関係者の日常的関わりの実態を明らかにした。従来、姻戚関係は比較的安定した社会関係資源として位置づけてきたが、本稿は詳細な民族誌データに基づき、姻戚関係が拡張可能で柔軟な性質もちつつ、同時に多様なコンフリクトや一時的に使われるような扱われ方が内在することを示した。すなわち、農業経営において姻戚関係は協働を促進する一方で、実際の労働分担や平等意識と交錯しながら、柔軟でありながらも不安定な「資

源」として機能しているといえる。

謝辞

本稿の基となる現地調査は、2023年度SOKENDAI研究派遣プログラムおよびJST次世代研究者挑戦的研究プログラム（JPMJSP2104）の支援を受けて実施されたものである。調査にご協力くださった現地の皆さまに、心より感謝申し上げます。また、本稿の執筆にあたり、指導教員の奈良雅史先生ならびに査読者の先生方2名には、丁寧なご指導と貴重なご助言を賜った。さらに、国立民族学博物館外来研究員の新海拓郎さんには、文章の校閲をお願いし、多くの貴重なご助言をいただいた。ここに記し、厚く御礼申し上げます。

注

- 1) X鎮人民政府の公開情報より。X鎮は匿名のため地名や統計の年度は伏せることとする。
- 2) 望郷県は仮名である。ハスの実は水田で栽培される換金作物であり、主要作物である稲とは一定の競合関係にある。国家の食糧安全保障を確保するため、ハスの実の栽培は制限の対象となっている。なお、現地関係者に不利益が生じることのないよう、本稿では参考文献に記載されている地名についても仮名表記に統一した。
- 3) 連襟と連橋は同じ意味を持つが、連襟は古文書にも見られ、より広く用いられる。
- 4) 紅包は、赤い封筒に現金を入れて渡すもので、春節や特別な行事に子どもや親族に贈られる。転じて、単に「お金を贈る」という意味でも使われる。
- 5) ここの蓬はハスの花托を指す。花托はハスの花の中央にある円盤状の部分で、ハスの実（種子）がここに形成される器官である。脱蓬機は花托とハスの実を分離する機械のことである。
- 6) Pの実家の邵陽へ帰るには、調査地から列車で長沙まで行き、そこで邵陽行き的高速列車に乗り換える必要がある。
- 7) 中国国内で使用者数が最も多いメッセージアプリである。

参考文献

日本語

植野弘子

2001 『台湾漢民族の姻戚』 風響社。

大橋史恵

2024 「人民公社化の下での家事・ケア労働—公共食堂と託児所を中心に」 堀口正・大橋史恵・南裕子・岩島史（編著）『中国と日本における農村ジェンダー研究：1950・60年代の農村社会の変化と女性』 晃洋書房：20-35。

賈 玉龍

2017 「人類学の親族論における宗族研究の再考」『北海道民族学』13: 15-30。

秦 兆雄

2005 『中国湖北農村の家族・宗族・婚姻』 風響社。

施 利平

2024 『中国の一人娘は出産とどう向き合うのか』 青弓社。

中生勝美

2023 『中国農村の生活世界』 風響社。

費 孝通

2019 『郷土中国』 西澤治彦訳、風響社。

山田七絵

2017 「中国の新たな農業経営モデルの特徴と存立条件」 清水達也（編）『途上国における農業経営の変革』 アジア経済研究所：33-53。

英語

Han, Min

2001 *Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform*. National Museum of Ethnology.

中国語

刁統菊

2009 「親属制度研究の另一種道徑—姻親關係研究述評」『西北民族研究』(2): 179-192。

2016 『華北鄉村社会姻親關係研究』 中国社会科学出版社。

費孝通

2007 『江村經濟』 上海人民出版社。

広昌県農業局科技組編

1975 『白蓮栽培技術』 江西人民出版社。

広昌県志編纂委員会編

2010 『広昌県志1991～2000』 方志出版社。

郭于華

1994 「農村現代化過程中的伝統親縁關係」『社会学研究』(6): 49-58。

2003 「心靈的集体化：陝北驥村農業合作化的女性記憶」『中国社会科学』(6): 79-92。

盧暉臨

2006 「集体化与農民平均主義心態的形成—關於房屋的故事」『社会学研究』(6): 147-164。

江西省広昌県志編纂委員会編

1994 『広昌県志』 上海社会科学出版社。

李霞

2010 『娘家与婆家：華北農村婦女的生活空間和後台權力』 社会科学文献出版社。

湘潭県地方志編纂委員会編

1995 『湘潭県志』 湖南出版社。

2015 『湘潭県志1988～2006』 方志出版社。

宋少鵬

2012 「从彰顯到消失：集体主義時期的家庭労働」『社会学研究』(1): 116-125。

閻雲翔

2012 『中国社会的個体化』 陸洋等訳、上海訳文出版社。

2017 『礼物的流動：一個中国村庄中的互惠原則与社会網絡』 上海人民出版社。

張慶国

2003 「現段階中国農村血縁与姻縁博奕現象探析」『許昌学院学報』(4): 15-18。

政府公文書

望郷県人民政府弁公室

2017年7月27日 「關於印發2018—2020年望郷県重金属污染耕地第三方修復治理效果承包和監理實施方案」。

2023年3月21日 「關於做好当前受污染耕地安全利用工作的通知」。

中華人民共和國農業農村部

2021年1月26日 「農村土地經營權流轉管理方法」。

2025年8月31日 受付

2025年11月17日 採択決定